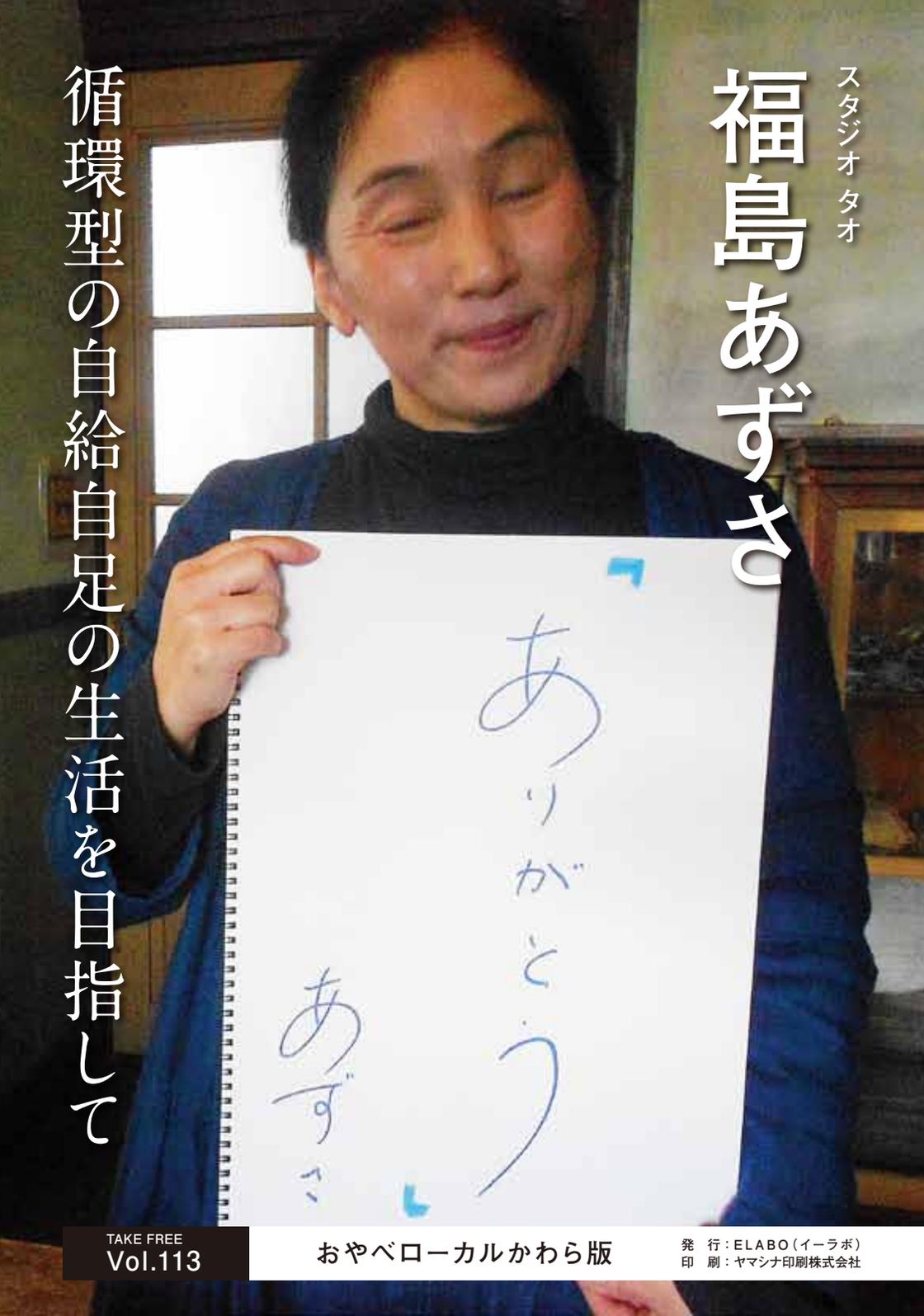


福島あずさ



循環型の自給自足の生活を目指して

「皆で見学にいきませんか？」
フェイスブックのそんな投稿で集まった仲間たちと、手織り手染めの布工房studio-taoへ見学へ行った。今回は、おやベローカルかわら版特別号として紹介します。

studio-taoの福島あずささん。突然の訪問にも関わらず、丁寧に紹介して頂いた。
「きっかけは、インドへの新婚旅行。その当時現地のの方が身にまとっている布にすごく興味をもった。」

日本に戻り興味は着物へ。着物はほどけば、一枚の布になる。その布には、多くの職人の技術と手仕事が含まれていることに気づく。そして出会うたのが、よこ糸の代わりに裂いた布を使う裂き織り。

「それを見てドーンときたんです。自宅の使わなくなった着物も織物になるんだって。」

織物の世界は、恐ろしく深い。次は素材を自分の手で作るという世界に入る。

まずは綿から始めた。明治中期まで100%自給されていた日本の和綿。今ではほぼ絶滅への道を辿る。明治の産業革命で織物が機械化された時、和綿は細くて機械では切れて利用できないことが理由だ。



そんな和綿を栽培している所が、鴨川にある。

「ここからもらった和綿の種を北陸で2、3年育て、その綿を使っています。」

まだ100%自給できていないわけではない。和綿の次は養蚕、そして麻。稲葉山の林道に生えている苧麻（カラムシ）を利用する。

「林道に取りに行くんだけど、管理するおじさんと競走なんです。」

6月ぐらいいになると苧麻はちょうどいいサイズに成長している。でも、同じ時期に草刈もされる。「おじさんやめてーって。」

ここで改めてstudio-taoを紹介します。富山の田園地帯で、天然素材と天然染料にこだわった布製品を制作している染織工房。

自宅兼工房は、大正末期に建てられた村役場を、移築復元したものだ。新建材は一切使わず、家具もアンティークで揃え、クーラーなどは無縁の生活。

それは自然に、日本古来の文化、衣、食、住を見直し、循環型の自給自足の生活を目指すことにつながる。

自家菜園では食料用の作物とともに、日本固有の綿「和綿」、苧麻、藍、紅花などを栽培し、染織素材の自給にも取り組む。2009年からは桑の木を植えて、養蚕も始めた。

また、風力、太陽光発電、太陽熱温水器、バイオマスエネルギー利用のペレットストーブなどを取り入れ、自宅、工房で使用するエネルギーの約半分を自給。

布への興味からはじまり、織り方、和綿の栽培、養蚕…、福島さんは、まだまだ深く進む。「五箇山の知り合いのおばあちゃんから聞いたんですが…」「昔は家の上でお蚕さんを、下では羊さんも飼っていた。繭の中に蚕が二匹入って玉繭がで

きることもある。そうなるとう絹糸にできない屑繭になってしまふ。屑繭から手作業で太さがまちまちな糸を作り、織られた織物が「紬（つむぎ）」。

五箇山ではこの屑繭と羊毛を一緒に紡いで、セーターにして着ていた。」

今思えば、ものすごく贅沢なもの。でも当時は、普通。自分の家にある屑繭と寒いから羊毛を併せて使っていた。

「その当時は、おばあちゃんは嫌だったんですって。ぼこぼこで工業製品じゃないものを着るのは。」

「でも、その話を聞いて、ああそういうことを目指したいなって思った。さすがに羊はまだ飼えないけど。」

「仲間たちと一緒になら、全部自給っていう道も可能性があるんじゃないかって。」

■手織り手染めの布工房

studio-tao

〒993200033

富山県小矢部市芹川963-1

TEL/FAX

0766-67-6402

http://www.studio-tao.com